

STUDIO M O U N



STUDIO MOUN

古城龍児と小畑俊洋が主宰する建築設計事務所。福岡を拠点に、商業空間や住宅の建築・インテリア、家具、プロダクトなど、空間に纏わるデザインを全国で幅広く手掛けている。近年の主な作品に、「GC Nagasaki Dental Station」(2023 年)や「鯨 幸仁」(2022 年)、「fan」(2022 年)、「雲仙の家」(2021 年)など。

古城 龍児 / ryuji kojo
建築家・空間デザイナー

1987 鹿児島県生まれ
2010 長崎総合科学大学 卒業
2010 岩本組(工務店)東京
2014 ND 企画設計(設計事務所)沖縄
2016 株式会社 CASE(設計事務所)福岡
2019 STUDIO MOUN 主宰

小畑 俊洋 / toshihiro obata
建築家・空間デザイナー
九州産業大学非常勤講師

1990 長崎県生まれ
2013 九州産業大学 卒業
2013 株式会社 CASE(設計事務所)福岡
2020 STUDIO MOUN 一級建築士事務所 共同主宰
2022 九州産業大学非常勤講師

PHILOSOPHY

私達は、建築を思考することにおいて「フィジカルな体験」をととても大切に考えています。

都市環境や空間の中に存在する様々な形は、人体を通して体感します。
それは、造形物や環境に対峙する時、身を置く時に、人体の視覚や聴覚、触覚で感じる
以下の「身体的自然」のようなものです。

- ・訪れる人や使用する人の体験
- ・人体の動作とスケール感
- ・人体とマテリアル
- ・空間の体感スケール
- ・造形物が放つ“気”のようなもの

もう一つ大切に考えていることは「メンタル的な体験」です。
感覚的な体験は、フィジカルな体験の延長線上に存在していると考えていて、感じてきた経験は
肉体的に備わっていると考えています。
それはつまり、空間に漂う「空気感や感覚的な気」のようなものです。

建築や空間において確実にメンタルに訴えかける空気感が存在すると考えています。
私達は、空間や営む時間をつくり出すために、建築というものを使いたいと考えており、
そのために「意匠や造形」「構成や素材」を必要としています。

AWARD

A' Design Award・BRONZE(2024 年)
German Design Award 2024・GOLD(最優秀賞)(2023 年)
iF DESIGN AWARD 2024(2023 年)
日本空間デザイン賞・short list(2023 年)
福岡県木造・木質化建築賞・奨励賞(2023 年)
JID AWARD Interior Product 部門・入賞(2023 年)
ウッドデザイン賞(2023 年)
JID AWARD NEXT AGE 部門賞(2022 年)





GERMAN
DESIGN
AWARD
GOLD
2024



A'DESIGN AWARD
& COMPETITION
WINNER 2024
BRONZE



日本空間デザイン賞 2023

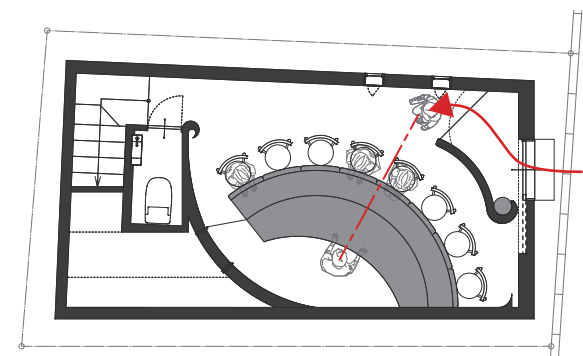


JAPAN WOOD DESIGN
AWARD 2023

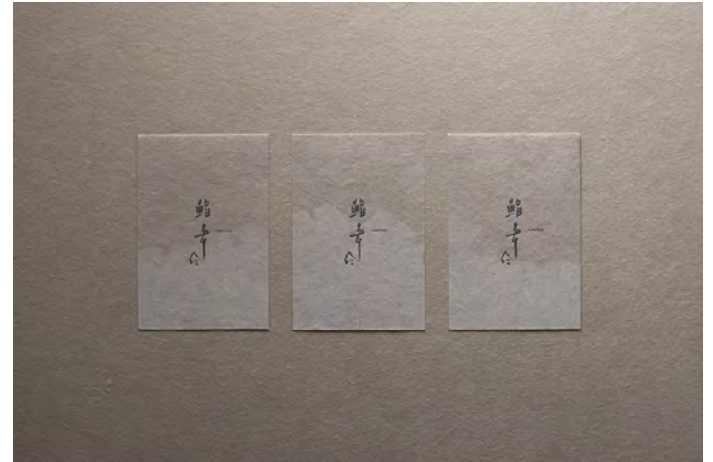


JID AWARD 2023

福岡県木造・木質化建築賞



用途：鮨店
計画地：福岡県福岡市
面積：24.06 m²
計画期間：2021 年 3 月～8 月
竣工：2022 年 12 月



福岡・平尾にある鮎店の設計である。

店主の温厚な人柄や、手仕事によって食材の旨みを引き出す職人としての姿勢を体現するため、手触りのある素材を活かしながら空間を構成した。

まず、客席を最大数確保するために、扇形のカウンターを店内中央に計画。その形状に沿うように曲線を描く壁で、客席とエントランスとを仕切った。これにより、外部の気配や客の出入りを気にせず、落ち着いて鮎を味わえる空間をつくり上げた。

オリジナルの手漉き和紙を貼ったカウンターのバックの壁面には緩やかなカーブをつけており、同様の仕上げを施したエントランスの曲面壁と対になって客席をやさしく包み込む。

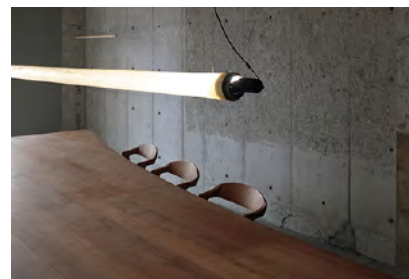
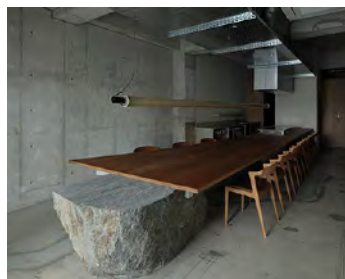
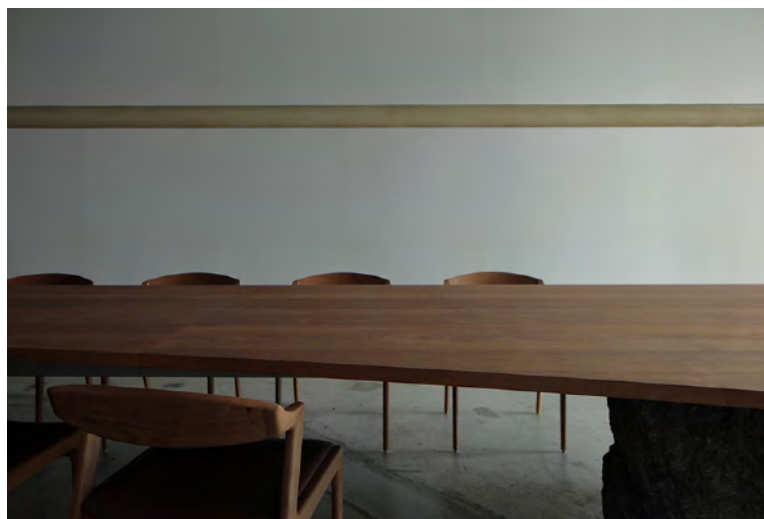
伸びやかな模様が連続する和紙のデザインは、紙を漉く際に胡粉を流すことで、水が流れる様を大胆に表現したものだ。その上にあえて散らした水滴の跡が、静かな迫力を感じさせる。

店主の舞台となるカウンターの天板は、銀杏とパドック材を特注の刃物で削り出し、端部まで滑らかに仕上げた。銀杏は歩留まり良く切り出すことで、端材を鮎板やまな板に活用している。

3本脚のイスは、効率良く配置できるようカウンターに合わせてデザイン。地元で採れたヒノキの無垢材で製作した。木目の見え方を考慮して部材を組み合わせており、曲げずに削り出した背もたれが、その印象を際立たせる。脚と幕板は二重ほぞで接ぎ合わせ、長年の使用にも耐え得る高い強度と耐久性を確保した。

本計画では、インテリアデザインに加えて、鮎板や看板、名刺、お礼状などの店舗（ブランド）を表現・伝達するためのツールのディレクションまで一貫して行った。多様な作家と協業し、自然素材本来の特性や余白を活かして丁寧につくり上げた空間やツールは、時間と共に表情を変え、無二の空気感を醸成していく。

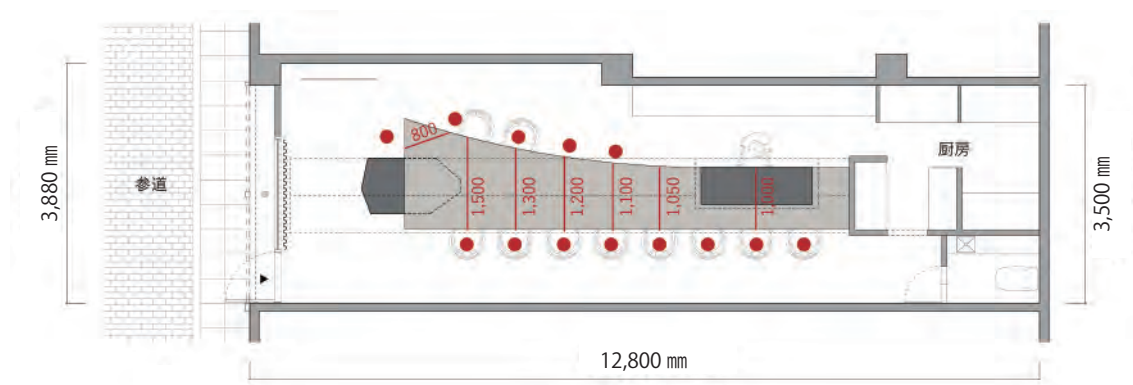




素材に重きを置いた、鉄板焼き「Messi」のプロジェクト。
計画地は、福岡市東区。香椎宮の参道に面した場所に位置する。周辺を施主と一緒に散策しながら土地の環境や空気感を共有しつつ、設計を進めていった。

施主の生まれ故郷である福岡・田主丸は緑豊かな町であり、東西に約30kmにわたって起伏の多い耳納連山が連なっている。この山々が3～4億年前の変成岩で形成されていることから着想し、店の顔となるカウンターに自然石を大胆に使うこととした。天板には厚さ33mmのチェリーの無垢材を採用し、石の重厚感と天板の軽やかさが対照的に見える造形を検討。構造計算を行い、途中に支柱のない無柱空間として7200mmのロング天板を乗せている。

テナントは床・壁・天井がスケルトンの状態で間口が狭く、参道のある北側はシャッターで仕切られ、奥に長い形状であった。そのため、自然光の入る参道側にカウンター席を配置し、奥に厨房やトイレを集約したシンプルな平面構成としている。カウンターひとつに客席を集約することで、全ての客の意識が鉄板に向かう設えとし、店主や客が溶け合う距離感が生まれることを意図した。



用途：鉄板焼き店
計画地：福岡県福岡市
面積：45.20 m²
計画期間：2023年3月～6月
竣工：2023年9月



福岡・平尾にある不動産店舗の設計である。

ここでは「プリコラージュ」という思考を持って計画を進めた。プリコラージュは理論や設計図を元につくる「設計」とは対照的なもので、その場で手に入る物を寄せ集めて、試行錯誤しながら新しいものをつくる考え方である。

ここでは、大きく2つのプリコラージュを行った。

①既存オブジェクトのプリコラージュ

既存の空間を定義づける柱・梁・床・壁・天井など、内部空間に接する要素を活用。柱・梁といった力学的に建築の骨格をなし、エネルギーを受けるものをできる限り表面化させる仕上げとしている。非耐力壁は、ビニールクロスを剥がすことでその裏にある新たな仕上げの獲得を目指した。

②建築領域におけるプリコラージュ

建築的領域の中で資材を寄せ集め、18のオブジェクトと置き家具で空間を構成した。

平面プランは、作業スペースと接客スペースを明確に分け、全体の8割程度を接客スペースとしている。できる限りゆとりのある接客スペースを確保することで、フレキシブルなオブジェクトの配置転換により流動的に環境を変化させられようにした。

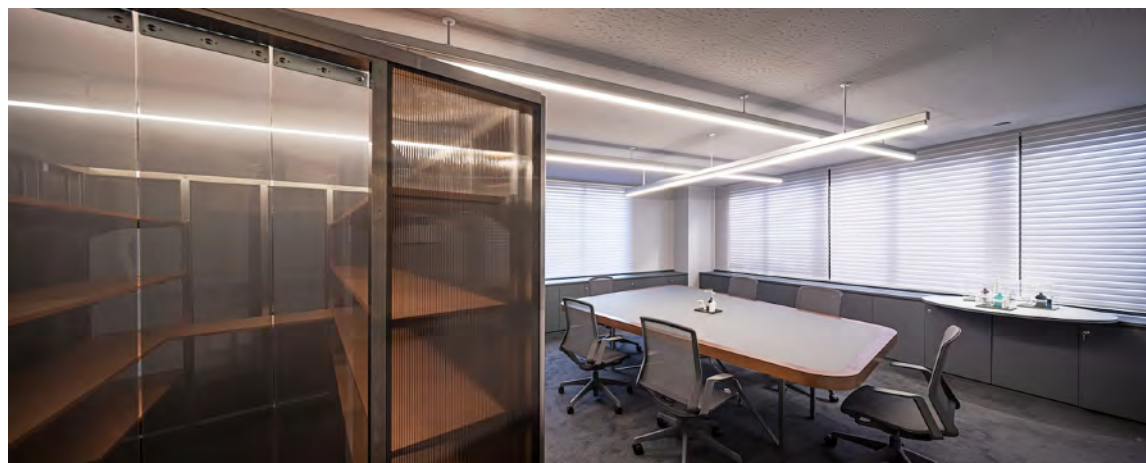
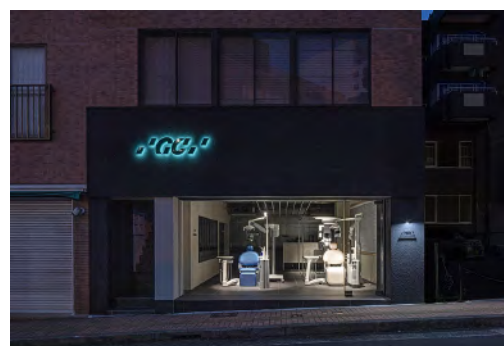
利用者（施主のお客様）に対しては、整列や羅列、グリッド状の配置ではない、間を持たせた空間でサービスを提供し、リラックスした印象を与えることを意図とした。

本プロジェクトの中で特に印象深いものは、コンクリートである。それは建築と家具の境目のようなもの。素材や成り立ちは建築的でありながら、配置は家具的に必要な用途に寄り添う形で存在している。

我々はこれらを「準躯体」として位置付け、空間の態度や気配を高めてくれるものとして設計した。



用途：オフィス
計画地：福岡県福岡市
面積：102.25 m²
計画期間：2023年5月～6月
竣工：2023年8月



歯材料メーカー「GC」の長崎ショールームの計画である。
歯材料メーカーとして 2021 年に創業 100 周年を迎えた同社は、歯科医院の営業に欠かすことのできない材料の開発から製造まで行っており、国内のみならず世界的にもシェアを獲得している。

今回の計画は、100 周年事業の一貫である全国の営業所リブランディングの第一弾として位置付けられていた。

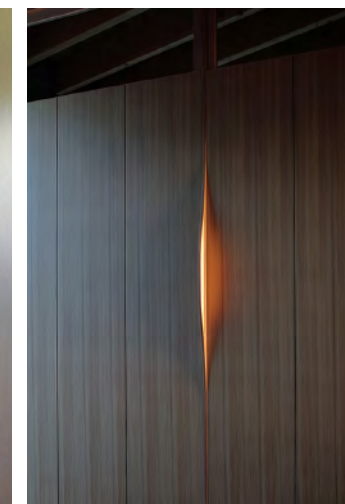
これまでのショールーム兼事務所はビルの 2 階にあったため、認知しにくいことが課題であった。加えて、今回 1 階テナントにショールーム (2 階はオフィスとして計画) をつくることになったが、広さは 15 坪ほどであり、機材を見せる上で十分なスペースが取れないことも課題として浮かび上がってきた。

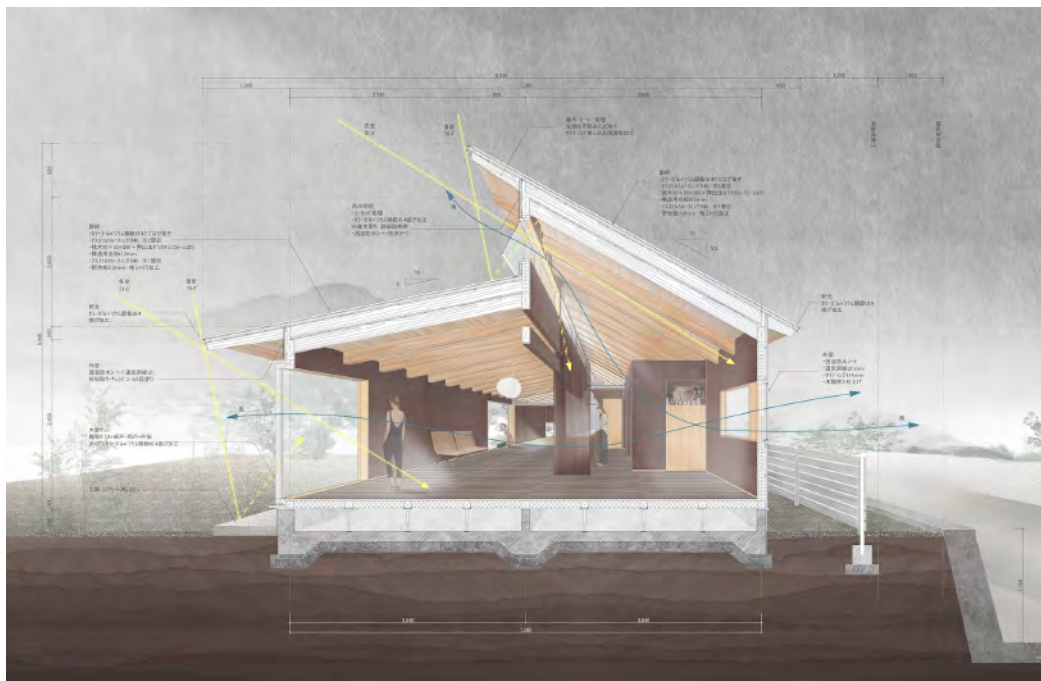
まず、視認性を向上するため、製品の見え方を重視し、ショールームのショーケース化を図っている。継ぎ目のない一枚のガラスでファサードを構成し、通りからもショールームを見通せるようにした。また、長さ 6000 mm のライン照明を 8 本設置し、日中でも明るい照度を確保。斜めに設置することで、外部からも明るさをより感じやすい計画とした。夜間は光源をダウンライトに絞ることで製品が浮かび上がり、文字通りショーケース化している。

インテリアではボリュームのある機材を配置するために、「線材のフレーミング」による空間構成を考えた。特にレントゲン機器は、歯科医院での最低設置寸法を体感するための 2m の平面空間が求められていたため、面ではなく線として解くこととした。面をつくると途端に空間化してしまうからである。ショールームの最奥にある滅菌器などの機材類も汚染度を示すゾーニングと共に配置し、フレーミングによる機材のショーケース化を図った。

素材については、内外共に試作を繰り返したステンレスのパイプレーション仕上げを多用している。経年変化を起こしにくく、ギラつかない品のある素材を用いることで、メーカーのブランドイメージを表現した。

用途：ショールーム
計画地：長崎県長崎市
面積：97.72 m² / 1 階 50.44 m², 2 階 47.28 m²
計画期間：2022 年 9 月～23 年 7 月
竣工：2023 年 10 月





敷地は長崎県雲仙市にあり、島原半島のほぼ中腹に位置している。周囲を海に囲まれた半島の中央には雲仙普賢岳がそびえ、温泉が湧き出る肥沃な土地は、赤土の景色が広がる魅力的な場所である。

施主はこの地で60年暮らし、現場監督と兼業で農家を営んでいる。そのため、土地の特性や季節による日照条件、風道などにも詳しく、ヒアリングしながら現地を確認し、土地の情報を読み解くことからスタートした。

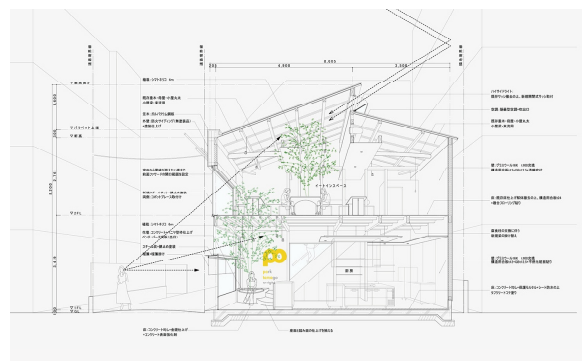
敷地西側には田畑が広がっているため遮るものがなく、西日の強烈な光を遮ってほしいという要望があった。そのため、西側に屋根を傾けながら、東南東側を主要採光面として大きく開くこととした。現地の調査を行っているのと田畑の風景や赤く染まって沈む夕日があまりに美しい四季の移ろいを映し出していたため、できる限り西側には閉じつつも、その風景を生活の中に取り込む計画としている。

東側にある農舎と新たに計画する建築との間は、駐車スペースを兼ねた中庭に。周囲に遮るもののないこの土地は、普賢岳から強い風が吹き下り、その風による被害が想定されるため、山からの風が抜けていく道を確保した。高さやプロポーションをそろえることで2棟を応答させ、敷地全体を一体とした生活の場の創出を目指している。

平面計画では、東側に生活の中心となる諸室を、西側には水廻りを中心に配置。エントランスから、広がりのある田畑を目指して緩やかな曲線を描いたアプローチを進むと、二つの屋根を行き来するように室内へと入っていく動線計画となっている。空間の特徴にもなっている大きな二つの屋根の構成は内部空間にそのまま現れ、奥へと進むに連れて天井の高さが切り替わる。連続する登り梁が生み出す様々な角度の風景を住空間で獲得すると共に、体の向きを変えた正面には季節の移り変わりを切り取る窓を設けている。

屋根の形状は、西側5.5寸勾配、東側2寸勾配とし、効率良く自然光が奥まで入るように設定した。この特徴的な5.5寸勾配の屋根の斜角は、冬季の太陽高度に合わせている。西側の日差しを遮りながら東側に開閉式のハイサイドライトを設けることで、西側に配置したダイニングキッチンやエントランス、廊下への採光や重力換気を利用して夏でも風が通り抜ける計画とした。

用途：ショールーム
計画地：長崎県雲仙市
面積：115.93㎡
計画期間：2020年2月～12月
竣工：2021年7月



『ポーたま』とは、沖縄のソウルフードであるポークたまごおにぎりを、最も美味しいできたてを味わってほしい想いから沖縄で創業した「ポークたまごおにぎりの専門店」である。

「ポーたま福岡赤坂店」は、コロナ禍での換気効率・空気の浄化作用を持つ建材の選定などに配慮し、「公園のような空間」を計画の軸に据えて設計した。

計画建物は市民の憩いの場である大濠公園や、福岡市美術館などが集まった福岡の中心部に位置し、隣接する公園に面する大通りから一本入った路地にある。こうした立地特性やコンセプトからテイクアウトを中心とした販売方法と、「路地に対しての在り方」を重視し、内空間が通りへと参み出すように意識した室内の構成が明快に分かるファサードとしている。

改装に伴い、既存建物の老朽化や白蟻による被害といった問題があった。そのため現場の軸組を整えつつあらわにし、色濃く経年変化した木造架構で新旧を共存させる空間構成として、各部分のメンテナンスや更新性に配慮しながら設計した。

1階はオーダーカウンターと厨房、2階はイートインスペースとし、内外の境界付近に配置した植栽の枝葉が上下階、内外との関係性を作り出すと共に

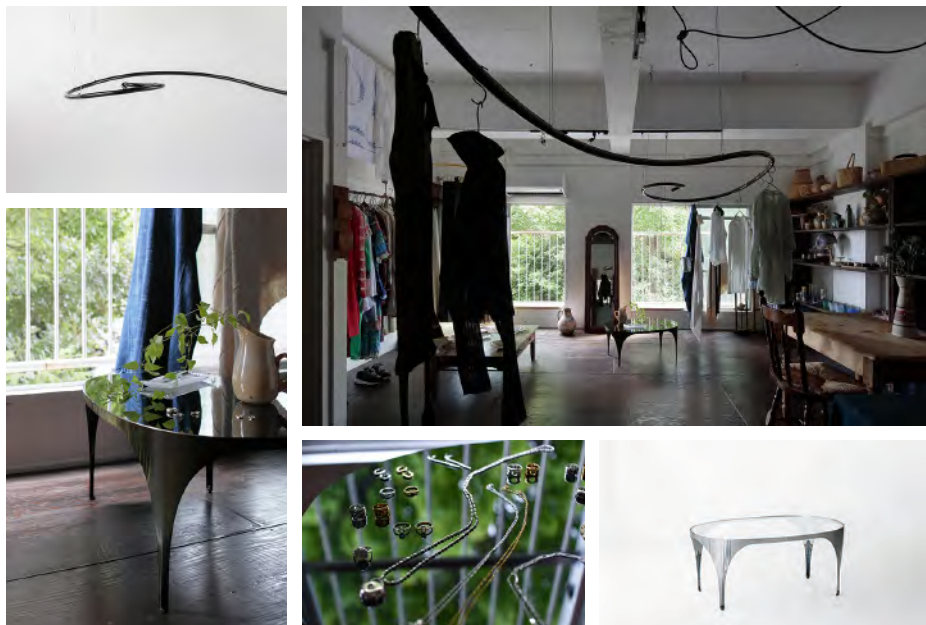
植栽の呼吸を感じる空間は、浄化された空気のイメージを引き出す役割も持ち、内部の漆喰による白壁の浄化作用と相乗的なイメージを作り出す。

家具や手摺りは屋外の部材寸法を採取したディテールとしている。

「木漏れ日のベンチで待つ時間、2階での食事に新たな発見があることを願います」

用途：飲食店
計画地：福岡県福岡市
面積：67.2㎡
計画期間：2021年5月～21年7月
竣工：2021年9月

「physis」（セレクト＆ヴィンテージストア）



「physis」には、長く使ってもらえるようにという想いで一点一点セレクトされた、職人の手仕事が際立つ質の良い洋服や雑貨が並ぶ。施主よりハンガーバーとテーブルの依頼を受け、造形による空間への影響とスケール感の操作で一体的な空間をつくることを試みた。

ハンガーバーのデザインでは、自然界においても見られる美しい数字の並び「フィボナッチ数列」と密接な関係にある黄金比から生まれる黄金螺旋を用いることとした。一見すると一本のパイプを自由に曲げているように見えるが、全ての部材は 32mm の鋼管パイプにペンダーで二次曲率を与えることで、製作の容易さによるコストコントロールに配慮している。また、3 次元的な動きを表現したいと考え、各接点にて上下方向に 10 ～ 20 度の角度を与え、その接点部分を溶接して繋ぎ合わせることで自然の中に存在する「うねり」を表現した。接合部の一部は皿ビス止めにより、分解、移設、再構築できることとしているため、展示会等必要に応じて移設することも可能だ。

テーブル形状の輪郭にはスーパー楕円を採用。天板は 500×800 mm の鏡面仕上げのカラーステンレスを使用しており、緑や空を映し出し、物を置くときまるで浮かんでいるように錯覚する。一方で、脚は水が滴るような繊細な状態を目指し、薄板スチールをスーパー楕円の形状で切り取り、反転させることで先端をよりシャープにした。足元を限りなく細くし、最もシンプルな方法で安定させることを模索し、薄板スチールを板の状態から徐々にアングル化させることで座屈しにくい形状としている。熟練の職人が何度も試作して得た成果である。

「Flitch」（廃材活用）



突板の工場を見学した時、「フリッチ」と呼ばれる、丸太をソマ角に製材したものの端部が切り落とされ焼却されていることを聞いた。

そもそも突板とは、天然木を紙のように薄くスライスし、合板に圧着して家具や建具などの化粧材として使用される建材である。ここで使われる木は、密実に詰まった質の高い肌を持ち合わせている。無垢板より安価かつ軽量であり、寸法や形状の安定性の高い合板へ貼り付けて使用する突板は、合板の寸法に合わせてつくられることが多い。そのため、規格寸法に合わせて丸太の端部が切り落とされるのだ。最初に聞いた瞬間から、もったいないと感じた。特に建築や家具の業界では天然木の家具と言うと、とても高価な価値があるものだからである。

この美しくそぎ落とされた無垢の木材の造形的な魅力に惹かれ、できるだけ少ない手数で新たな価値を獲得することを試みた。

木材から家具への変換点は、物質的にどこに存在するのか？ 形状を見ると容易に様々な使用方法を想像することができるこの材料は、どの時点で人間に大切にされるものになるのか？

ここでは形状はできるかぎりそのままに、表面に仕上げを施す（技術を乗せる）ことで変換点を探している。塗装面と素地を塗り分けることで木材の荒さと艶やかさを同居させることとした。イスやサイドテーブルなど、さまざまに活用できる可能性を秘めている。